

研究代表者名： 松林公蔵<sup>1</sup>

共同研究者名： 和田泰三<sup>1</sup>、石根昌幸<sup>1</sup>、北 徹<sup>1</sup>、奥宮清人<sup>2</sup>、西永正典<sup>2</sup>

施設名： 京都大学東南アジア研究センター<sup>1</sup>、高知医科大学老年病科<sup>2</sup>

### 研究の背景

高齢者がかかえる多くの慢性疾患は、加齢とともに増加し、根治させることは困難なことが少なくない。慢性疾患が急性疾患と異なる点は、主要な次元が生死よりもむしろ、患者自身の苦痛、能力の障害、社会的ハンディキャップというように、簡単に測定することが困難で、しかも患者自身にしかわからない問題をかかえていることである。医療技術が高度に発達した現在においても、患者の苦痛、能力の障害、ハンディキャップを正確に測定する医学検査は乏しい。高齢社会を迎えた現在、老年医学の究極の目標は、この「能力障害＝disability」と Quality of life (QOL) を評価し、障害を可能な限り改善あるいは予防し、QOL の向上をめざすことにおかれ始めている。そして、このような慢性疾患をかかえながら高齢者が過ごすのは多くの場合、病院ではなく地域であり家庭である。したがって、病院を訪れる高齢者を対象とする病院医学だけでなく、地域在住高齢者の実態を直接把握する community-based のフィールド医学的アプローチが重要である<sup>1)</sup>。

本研究の特徴は、本邦地域在住高齢者の老年医学の実態を疾病のみならず、日常生活能力からみた身体的、精神的、社会的ならびに生態学的な面から包括的にとらえ、かつ縦断的に介入し、その推移ならびに効果に関する地域特性を明らかにすることにある。今回は、地域在住高齢者の抑うつの問題に注目した。

### 研究の目的

地域在住高齢者に対する要介護状態の発現予防のためには、要介護発現に寄与する危険因子を解析し、適切な介入を実施することが重要である。本研究の目的は、65歳以上の地域在住高齢者の疾病、Activities of Daily Living (ADL) ならびに QOL を縦断的に追跡するための国内フィールド3地域において、高齢者の抑うつ状態の実態と ADL ならびに QOL との関連を明らかにすることにある。

### 対象と方法

対象としては、京都市 A 町在住の 65 歳以上の高齢者 2430 名 (男 : 女 = 1020 : 1410、平均 74.5 歳)、滋賀県 B 町在住高齢者 939 名 (男 : 女 = 383 : 556、平均 74.7 歳)、北海道 C 町在住高齢 742 名 (男 : 女 = 330 : 412、平均 74.4 歳) である。15 項目の質問表からなる Geriatric Depression Scale (GDS) 簡易版を用いて抑うつの有無を評価した。GDS スコア  $\geq 5$  点を「抑うつ傾向」、GDS スコア  $\geq 10$  点を「抑うつあり」と定義した。同時に、アンケートにより基本的 ADL7 項目 (歩行、階段昇降、摂食、排泄、更衣、入浴、整容)、情報関連 ADL5 項目 (視力、聴力、会話、電話、記憶)、老研式活動能力指標を用いて、IADL5 項目、知的活動能力 4 項目、社会的活動能力 4 項目と医学的事

項ならびに Visual Analogue Scale による QOL 評価<sup>2),3)</sup>(主観的健康度、気分、家族関係、友人関係、経済状態、生活満足度、主観的幸福度)を行った。

### 結果

GDS $\geq$ 5で定義した「抑うつ傾向」を示した高齢者はA町41%、B町43%、C町42%であり、GDS $\geq$ 10で定義した「抑うつあり」の高齢者の割合は、A町12%、B町11%、C町8%であった(図1)。抑うつ高齢者と抑うつのない高齢者を比較すると、3町に共通して、前者ですべてのADL項目、すべてのQOLスコアが有意に低下していた。また、多変量解析の結果、地域在住高齢者の「抑うつ」と関連する要因として3地域に共通するのは、「社会的活動能力の低下」、「主観的健康度が低いこと」、「主観的経済状態が不良であること」があげられた。

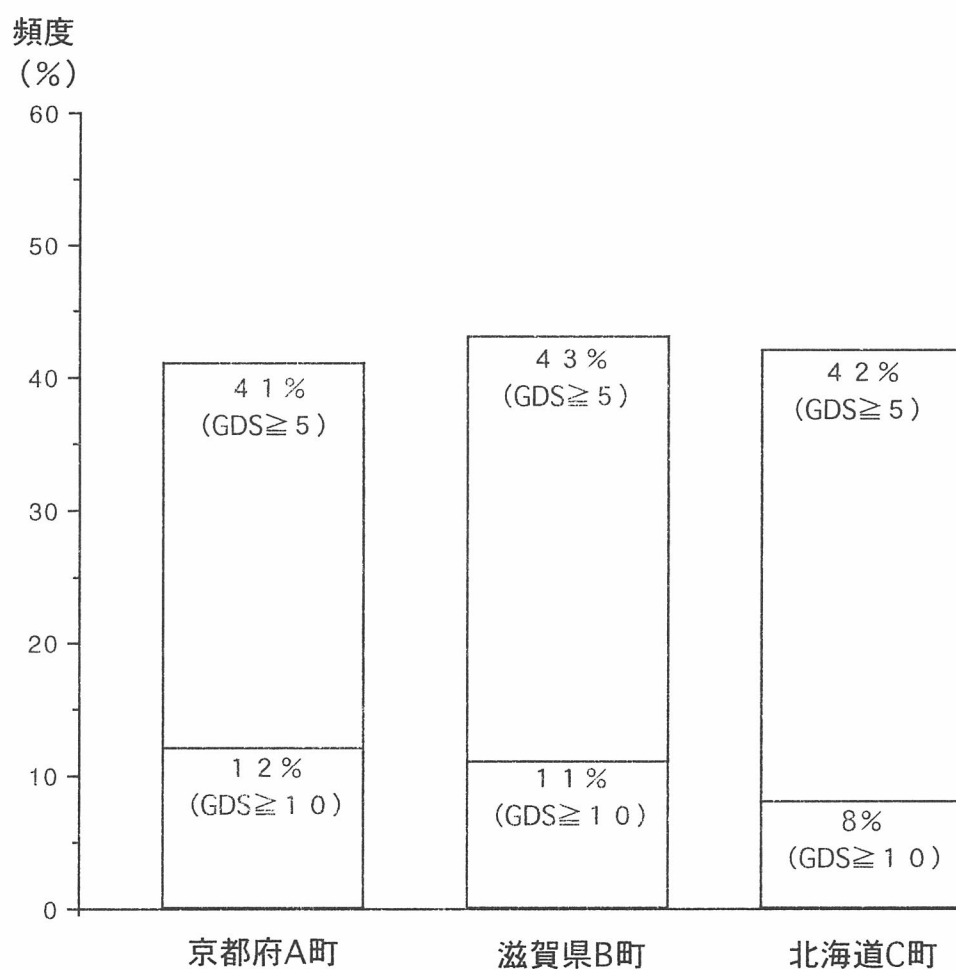


図1 本邦地域在住高齢者における抑うつの頻度

### 考察と結論

本邦地域在住高齢者のなかには、各地域に共通して、約10%程度の「抑うつ」者が認められる。「抑うつ」高齢者は、非「抑うつ」高齢者に比して、そのADLならびにQOLが有意に低下している事実が明らかとなった。地域在住高齢者の「抑うつ」は、精神科的な「うつ病」とは異なる可能性があるも

の、高齢者のための地域保健を考えるうえで、「抑うつ」に関連する因子の解析とそれに対する介入は重要な課題と思われる。

#### 文献

- 1) Matsubayashi K, Okumiya K, Wada T, Osaki Y, Doi Y, Ozawa T: Secular improvement in self-care independence of old people living in community in Kahoku, Japan. *Lancet* 347, 60, 1996
- 2) Matsubayashi K, Okumiya K, Osaki Y, Fujisawa M, Doi Y : Quality of life of old people living in the community. *Lancet* 350, 1521-1522, 1997
- 3) Wada T, Matsubayashi K, Okumiya K, Del Saz EG, Kita T: Objective health and subjective economical satisfaction in indigenous people in West Papua. *Lancet* (in press), 2002.